

新 著 紹 介

紅 頭 嶼 生 物 相

日本生物地理學會發行

本書はさきに日本生物地理學會々報、第2巻第2・3號及び第3巻第1號に登載された紅頭嶼關係の論文を合輯し、344 pp. の單行書として發刊されたもので、内容體裁ともに全然前記雜誌のそれと同じい。

紅頭嶼は臺灣の南端から東方、臺東を距る49哩の洋上に泛ぶ面積3方里周圍9里餘といふ、眞に粟粒大の小火山島である。その陸の生物相が臺灣南部のそれに近いことは當然と考へられるが、部類によつては却つて南方洋上遙かのバタン・バブヤン兩島を介して比律賓群島のそれに類似し、又一方、北に近接する火燒島から龜山島を通じて八重山の諸島に對しても多少の共通性を示すので、生物地理學上極めて重要且つ興味深い島なのである。

本邦に於ける、生物分布の上から面白く重要な島々は片つ端から早くより外國人の採集調査に蹂躪された有様であるのに、この紅頭嶼には珍らしく全く外國學者が踏込んで居らず、従つてその生物調査の歴史は新しく、領臺後間もない明治30年、多田綱輔氏が萬難千苦して渡島されたのを最初とし、爾後渡瀨博士を始め數名の先輩が實地踏査をされたのであるが、何しろ不便極まる場所であり、同島生物相を云爲すべき資料はなほ不十分なるを免れず、今後幾年の研究に俟つべきものが多いやうに思はれる。

斯かる情勢の下に於いて、兎に角今迄に蒐集し得られただけの材料を土臺として各部門の權威者が詳細に研究されたものをば、同島研究の第一人者鹿野忠雄氏が綜括整理され、卷末に同氏の手になる紅頭嶼動物に関する文獻目録を附けて一書とし、世に公にされたことは、此島の、延いては之に隣接する前記島々の、生物相調査研究に向つて學者の興味を喚起する上にも非常に有意義なことである。それら専門研究者諸氏と之を刊行された日本生物地理學會當事者諸氏とに對して感謝と祝意とを表し度いと思ふ。

鳥や蝶の如き移動力の盛な動物が、距離的に近い臺灣本島特にその南端恒春半島地方の種類との間に最も近い關係を示すことに不思議はないと思ふが、私は鹿野氏のカタザウムシ *Pachyrrhynchus* 屬及びこれに近似の象鼻蟲の論文を一番面白く讀んだ。これ等の昆蟲は後翅を缺き全然飛翔の能力がないから、島嶼の上の分布を論ずるに特異な好例をなすものであるが、同島には固有種5の外にバブヤン島と共通のもの1種があつて比律賓系統との連絡が示される。鹿野氏はなほ他の甲蟲類に見られる事實をも併せ考へて、Wallace 線の北上延長部をばバタン・紅頭嶼の間でなく紅頭・火燒兩島と臺灣本島との間に劃さうといふ提議をして居られる。勿論この線は北上するに従つて著しくその明確さを失ふけれども、今後更に多足類・蜘蛛類・陸産貝類なども調査された上で考ふべきで、それにつけても火燒島・龜山島・八重山列島などの陸上生物相の調査に多くの興味を期待すべきであらうと思ふ。

本書の定價6圓はやゝ不廉に失するやうに思はれるが事情止むを得ぬものがあるらしい。たゞ強ひて瑕瑾を求めらば、さきに雜誌に附けた數項に亘る正誤訂正表をそのまま(勿論頁番號だけは改めてあるが)本書に添附する代りに、能ふ限りは本文の誤記・誤字を直して欲しかつた。この正誤表にさへ洩れた誤植が一再ならず眼に觸れたのは尙更遺憾である。同會ではさきに小笠原島生物相の一卷を纏めて出されたが、今後も之に類する美舉が繰返されるであらうことを希ひつゝ、この貴重な一文献を世に推奨し度いと思ふ。

大 島 廣